

# 異邦に生きた「日本人」の死

## ニューカレドニア日系移民の墓標調査から

Cultural Hybridity of Japanese Immigrants' Gravestones  
in New Caledonia

朽木量

問題の所在

- ①ニューカレドニア日系移民の経緯
- ②ニューカレドニア日系移民の墓標形態にみられる特徴
- ③銘文からみたニューカレドニア日系移民にとっての「死」

結語

### 【論文要旨】

本稿では、日本とは異なった環境的・社会的脈絡の中で、「日本人」の死に関する文化伝統が維持され変化する様子を見るために日系移民の墓に注目し、墓標の形態と銘文という二つの側面から、墓標に表現された彼等の死生観について考察した。

その結果、移民数が比較的少なく、日本と隔絶していたニューカレドニア日系移民の場合、以下の四点が指摘できた。即ち、①移民当初は手近なニッケル鉱山の鉱石を用い、最低限の情報を刻んだ簡素な墓標が先行し、移民がニューカレドニア各地に拡散して西洋化した日常生活を送り始めて以降に、日本における一般的な墓標形態との類似性が看取できる「日本式」の墓標が各地で建てられるようになったこと。②紀年銘表記では、当初より元号が用いられ、第二次世界大戦時まで継続すること。③僧侶がいなかったため、「釋日本人之墓」など戒名（法名）への志向性が認められる総供養碑も存在するものの、実際に戒名が記された墓標は僅かであること。④出生地に対する記載には「日本国」「日本人」という名乗りはほとんどないこと。

このことから、第二次世界大戦前のニューカレドニア日系移民にとっての「死」とは、日本語を用いた「日本式」の形態の墓標という日本の文化伝統を強く意識した表現形態の中にあるものの、「日本国」「日本人」という名乗りで「日本」が直接かつ声高に主張されていたわけでもなかった。墓標形態、紀年銘、戒名など墓標の要素毎に個別に変化しており、その意味で移民の墓標は日本的なものやホスト社会の要素を取り入れた混成物であり、彼らの中で生み出された「日本式」の墓である。移民たちが互いに墓をたてることにより彼らの中で生み出された「日本式」の墓標が維持されていたことこそ、移民にとっての「日本人」としての死のあり方が表れていると考えられる。

キーワード：ニューカレドニア日系移民、死生観、墓標研究、文化的ハイブリディティー、エスニックアイデンティティー